

働きの「糟」かすではなく  
働きの「中身」を見よ

金は溜まるべきもので、

溜めるものじゃない。

▼『小説渋沢栄一』

渋沢栄一は、たくさんの企業の設立や経営に関わっていますが、それらの企業を束ねて「渋沢財閥」をつくろうとしたわけでも、莫大な富を築き上げたわけでもありません。

渋沢は、少年時代に父親から実家の近くに住むお爺さんの話を聞かされました。そのお爺さんは大変な働き者で朝早くから夜遅くまで一年中働いたお陰で相当なお金持ちになりましたが、贅沢もせず働き続けました。「いい加減遊んで暮らせば」と忠告する人もいましたが、お爺さんは「金銀財宝は働いていくうちに出る糟（酒を絞り取った後の残り）」であり、

糟を求めるために働くわけではないと意に介しませんでした。

後年、渋沢はその話を思い出し「なるほど」と思い当たりました。人々は成功か失敗かを測る時、金銀財宝の多寡たかばかりを気にしますが、それは単に働いた後に残った糟を見ているだけで、肝心の働きの中身を見ようとしなない、というのです。

大切なのは、世の中のために「何を成したか」であり、それを忘れて財産ばかりを増やそうとするのは「恥ずべきではあるまいか」というのが渋沢の考え方でした。お金は結果として溜まるもので、強欲に溜めるものではないのです。